

IX 社会貢献

【到達目標】

開学当初より開催してきた公開講座を充実させ、また大学施設の開放によって地域社会に貢献すること、地域社会との交流や国際的交流を実現させること、大学の人的資源を活用した社会貢献を継続して行うことを目標とする。

1. 社会への貢献

(1) 社会との文化交流等を目的とした教育システムの充実度

【現状】

本学の建学の理念と社会貢献について

本学の社会貢献は、建学の理念に基づいて遂行され、また設立母体であるシャルトル聖パウロ修道女会の活動の歴史に裏打ちされている。すなわちキリストの福音を世界にもたらすためにその会員は、教育や福祉などの活動を通して修道者として生き、それが各々の時代の派遣された地域社会への貢献につながってきた。本来そうした後継者を育成する教育活動は、現代の日本においては幼稚園から大学・大学院までの教育を通して、間接的ながら社会貢献に寄与してきたと確信する。そうした建学の理念にもとづいて、全学的な取り組みとしては、国際交流センターや大学広報室を窓口として以下のようなものがあり、社会に向けて開放していると同時に学生たちへの教育的効果を企図して実施している。

① 講演会・コンサート

開催場所はいずれも本学講堂。

表9-1 講演会・コンサート

講演・コンサート名	講師・演奏者	年月日
クリスマス・コンサート	菊地真知子（本学講師）、齋藤泰子ほか.	2006年12月13日
白百合ホームコンサート	千葉さくら（ヴァイオリニスト）	2007年5月30日
シャンソン「パリを歌う」	上山美恵子（ソプラノ歌手）、 須江太郎（ピアニスト）	2007年6月21日
国際交流センター開設記念講演会「文化・芸術・美しさが一つになった国クロアチア」	駐日クロアチア全権特命大使 ドラゴ・シュタンブク氏	2007年10月23日
キャンパス整備完成記念講演「今、キリスト教大学に求められるもの」	学校法人上智学院理事長 高祖敏明 師	2007年9月24日
クリスマス・コンサート	菊地真知子（本学講師）ほか.	2007年12月22日

②国際交流活動への学生ボランティア

表9-2 国際交流活動への学生ボランティア

催事名・内容	主催／会場	年月日・期間
民間ユネスコ運動発祥 60 周年記念式典」に 53 名の学生ボランティアを派遣	主催：仙台ユネスコ協会 会場：江陽グランドホテル	2007 年 7 月 19-20 日
ホームステイ受け入れ 仙台の姉妹都市・韓国光州広域市からの高校生が本学学生宅にホームステイ	主催：仙台国際交流協会	2007 年 8 月 5-9 日
「国際交流まつり」に 15 名の学生ボランティアを派遣	主催：東北大学留学生協会 会場：東北大学片平キャンパス	2007 年 8 月 25 日
「仙台国際センターまつり」に 33 名の学生ボランティアを派遣	主催：仙台国際交流協会 会場：仙台国際センター	2007 年 9 月 23 日
「ユネスコ世界寺子屋運動」への協力 切手、テレホンカード、書き損じハガキの提供を通じて、世界各地の恵まれない子どもたちに給食・文房具等をプレゼント	全学	継続的に活動
「ブルネイからの大学生との交流レセプション」に本学学生 1 名を派遣	主催：仙台国際交流協会 会場：仙台国際センター	2007 年 12 月 11 日

③海外からの訪問・交流

海外から本学を訪問した文化交流の実例としては、フィリピンのシャルトル聖パウロ修道女会の教職員が日本の文化・教育事情を学び、本学教職員・学生との交流の機会を持つ目的で来訪した。本学学生は授業などでフィリピンでの教育制度や文化について教えていただきながら交流を深めた。また、毎年本学教職員もフィリピンの同会を訪問するなど密な交流が行われている。また、平成 18 (2006) 年 6 月に JICA 主催の青年招聘事業の一環として ASEAN 諸国の教育関係に従事している方々が来訪し、ミッションー貫教育の講義・視察・意見交換を行っている。

④国際教養学科専門科目「国際教養現地実習」における実習先での文化交流(平成 16 (2004) 年～)

アメリカ、オーストラリア、カナダ等の大学での語学研修とともに、現地市庁舎表敬訪問、小学校・老人福祉施設訪問・交流、現地文化体験（アボリジニ等）等を積極的にプログラムに取り入れ、学生と現地の人々との文化的交流を推進している。

⑤開講科目を通しての交流

学生は人間発達学科の「保育実習」、「施設実習」、「フィールドスタディ」等の科目で社会・現場との接点を持ち、理解を深めている。

⑥附属機関・姉妹施設を通しての交流

本学の附属機関のうち、図書館を除いた二つの研究機関、カトリック研究所および人間発

達研究センターは、現在のところ社会に向けた文化交流を目的とした活動は行われていない。他方、姉妹施設である社会福祉法人 仙台白百合会の高齢者福祉複合施設「カリタスの丘」は、平成 16（2004）年の創設以来、地域との交流が進んでいる。

【点検・評価】

本学において文化交流を目的とした社会に開かれた活動は少なかったが、大学広報室および国際交流センターの開設によって組織的・制度的に実施されている。内容は、本学の一大学としての規模としては望ましいものになっている。

カリキュラム上の開講科目では、平成 19（2007）年度から「キャリアデザイン」、「キャリア専門演習」といった科目が人間発達学科に新設された。これは社会と自分をより深く知り、自分の社会貢献のあり方をデザインするためのものである。教育の成果が、社会貢献の大きい人材の育成へと発展することが期待される。

研究所、研究センターはその性格上、文化交流を直接の目的としていないが、全学的な活動を支援する方向で関わることも期待できる。実習・ボランティアという機会に姉妹施設を通して学生が地域と交流をもっている点は評価できよう。

【将来の改善・改革に向けた方策】

全学的に実施されているものは、さらに文化交流の規模・内容ともにより良くしていくために、社会のニーズを探ることも考えられる。

人間発達学科の新設科目についてはインターンシップのシステム整備とキャリアサポート体制の検討も望まれる。

(2) 公開講座の開設状況とこれへの市民の参加の状況

【現状】

本学で開催された公開講座は、平成 18（2006）年度実績の概要では以下のようになっている。ただし、学術性の高い公開の講演会を公開講座と称する場合もあるので、本学において開催される公開講座および公開講演会をいくつかに分類しながら以下、現状について述べる。

表 9-3 公開講座の開設状況

大学 研 究	学 部 科	年間開設講座数	1 講座当たりの 平均受講者数	備 考
	人間学部	5	60	

[注] 1 2006 年度実績。

2 シンポジウム、講演会は含めない。

①大学主催の公開講座

従来、大学主催の公開講座は年 2 回行われ、一回目は外部講師が、また二回目は本学教員が講師となった。外部講師は本学カトリック研究所がその選定に当たり、よって、講座の内容もキリスト教に関連するものとなる傾向がある。市民がアクセスしやすいように仙台の中心部に会場を借りて実施してきた。本学教員が行う講座はより小規模であって本学を

会場とした。平成 19 (2007) 年度より公開講座は一回目のもの(外部講師による)だけとし、本学教員による講座は別形態をとることとなった。2002 年以降の公開講座の実施状況は以下の通りである。

表 9-4 大学主催の公開講座 (平成 16 (2004) 年度以降)

日時	講座名	テーマ	講師	場所	備考
2004 年 7 月 3 日 13:00-15:30	2004 年度 第 1 回	『アラブ人はキリスト教社会 になぜ疑念を抱くのか』—— 中東情勢を理解するために	久山宗彦 (カリタス女子短 期大学学長)	エ ル パ ー ク 仙 台 セ ミ ナ ー ホ ー ル	定員 80
2004 年 11 月 20 日 13:00-15:30	2004 年度 第 2 回	『男女共同参画社会ノス メ』——赤ちゃんから高齢者 まで	槇石多希子 (本学助教授) 大本泉 (本学助教授) 沼山博 (本学助教授) 玉蟲由樹 (本学講師)	本 学 講 義 室 II	定員 80
2005 年 7 月 9 日 13:30-16:00	2005 年度 第 1 回	『ルワンダに出会う』——内 線はなぜ起こったか? 難民の 現状と平和への願い	カンベンガ・マリールイー ズ	学 都 仙 台 サ テ ラ イ ト キ ャ ン パ ス	定 員 120 (受 講 者 133)
2005 年 12 月 3 日 13:30-15:30	2005 年度 第 2 回	『楽しく歩こう—ウォーキン グの文化—』	近藤義忠 (本学教授)	本 学 講 義 室 I	定員 80 (受 講 者 58)
2006 年 7 月 8 日 13:30-16:00	2006 年度 第 1 回	聖書は人間に何を語るか—聖 書の読み方—	森一弘 (真生会館理事長、 カトリック司教)	エ ル パ ー ク 仙 台 ス タ ジ オ ホ ー ル	定 員 120 受 講 者 数 161
2006 年 10 月 28 日 15:00-17:00	2006 年度 第 2 回	子どもの個性の理解—気質研 究からのアプローチ—	古田倭文男 (本学教授)	本 学 管 理 棟 3 階 会 議 室	定員 70 受 講 者 数 25
2007 年 6 月 30 日 13:00-15:30	第 20 回	カトリシズムと現代 「釜ヶ崎と福音—福音の真髄 を求めて—	本田哲郎 (ふるさとの家、 カトリック司祭)	エ ル パ ー ク 仙 台	定 員 200 受 講 者 数 147

平成 19 (2007) 年度の公開講座には共通テーマを付して、公開講座に先立つ 3 つの講座と同一のテーマとして開催した。その概要は以下のとおりである。

表 9-5 平成 19 (2007) 年度のミニ公開講座

日時	講座名	個別テーマ	講師	場所	備考
2007 年 6 月 2 日 13:00-14:30	2007 年度学都 仙台サテライ トキャンパス 講座第 1 回	「ラツィンガー先生 (現教 皇) の人柄と考え方」	里野泰昭 (本学元教授)	エ ル パ ー ク 仙 台	定員 50 受 講 者 数 23
2007 年 6 月 9 日 13:00-14:30	2007 年度学都 仙台サテライ トキャンパス 講座第 2 回	「エキュメニズム、他の諸教 会との関係からみる『カト リック教会』」	宮崎正美 (本学准教授)	エ ル パ ー ク 仙 台	定員 50 受 講 者 数 25

2007年 6月23日 13:00-14:30	2007年度学都 仙台サテライ トキャンパス 講座第3回	司教団メッセージ「信教の自由と政教分離」～この文書発表に至るまでの経緯～	石川治子（カトリック中央協議会社会福音化推進部部長）	エールパーク 仙台	定員50 受講者数35
-------------------------------	---------------------------------------	--------------------------------------	----------------------------	--------------	----------------

②リカレント講座

大学全体として実施しているリカレント講座は、仙台市教育委員会（平成19（2007）年度からは学都仙台コンソーシアムに移管）が主催するネットワーク講座の一部として市民に提供しているもので、5～10回の連続講座である。平成17（2005）年以降、本学で実施されたリカレント講座の概要は以下のとおりである。

表9-6 リカレント講座

実施期間	実施回数	テーマ	講師	場所	備考
2005年 9月3日 -10月1日	5回	英語によるビジネスイングリッシュ	アンソニースミス (本学教授)	学都仙台サテライトキャンパス	定員50 受講者数66
2005年 10月1日 -10月29日	5回	福祉事業の経営環境の変化と経営管理者の役割	中熊靖（本学教授）	学都仙台サテライトキャンパス	定員50 受講者数27
2006年 6月3日- 7月8日	5回	ビジネス中国語	賈軍（本学講師）	学都仙台サテライトキャンパス	定員50 受講者数26
2006年 6月3日- 7月29日	7回	シネマイングリッシュローマの休日	アンソニースミス (本学教授)	学都仙台サテライトキャンパス	定員50 受講者数61
2006年 10月14日 -11月18日	5回	福祉事業の経営環境の変化と経営管理者の役割	中熊靖（本学教授）	学都仙台サテライトキャンパス	定員50 受講者数27
2007年 5月12日 -8月4日	10回	はじめての中国語	賈軍（本学講師）	学都仙台サテライトキャンパス	定員30 受講者数17
2007年 9月29日 -10月27日	5回	シネマイングリッシュ	アンソニースミス (本学教授)	学都仙台サテライトキャンパス	定員50 受講者数32
2007年 11月24日 -12月22日	5回	福祉事業の経営環境の変化と経営管理者の役割	中熊靖（本学教授）	学都仙台サテライトキャンパス	定員50 受講者数25

③学科主催、研究所・研究センター主催

総合福祉学科はスザンナ・ヴォーゲル氏を招聘し、2007年10月13日（土）に公開講座「共感 Empathy—人間関係で大切なこと…ケースワークとスーパービジョンの基盤として」を本学講堂において開催した。人間発達研究センターは、創立以来、以下のような公開講演会を開催してきた。

表 9-7 学科主催、研究所・研究センター主催 講座

日 時	講座／講演題	講師	場所	備考
2005年10月	創立記念シンポジウム「現代社会における人間発達の諸問題-柏木恵子先生を迎えて-」開催	柏木恵子	本学会 議室 I	
2005年10月	創立記念シンポジウム「現代社会における人間発達の諸問題-柏木恵子先生を迎えて-」	柏木恵子	本学会 議室 I	
2006年10月	人間発達研究センター第1回公開講演会 「子どもの個性の理解-気質研究からのアプローチ-」(本学公開講座と兼ねる)	古田倭文男(本学人間 発達研究センター長)	本学会 議室 I	
2007年 10月20日 16:15-17:45	人間発達研究センター第2回公開講演会 「子どものこころに響かせたい-絵本読み聞かせ隊の挑戦-」(志茂田 景樹(絵本読み 聞かせ隊隊長・直木賞 作家)	本学講 堂	

④カリキュラム上の開講科目の開放

カリキュラム上で開講している科目の1回を特別授業として公開し、学外から特殊なテーマについてスペシャリストを講師に招く試みが一部の科目にある。例として国際教養学科の専門科目「ヨーロッパの歴史と文化Ⅲ」ではハリストス正教会司祭を授業内講師に招いて実施してきた。共通科目「宗教と美術」の特別講義においても同様に学外からの聴講者を受け入れて実施している。

【点検・評価】

大学主催の公開講座にはのべ458人、各回平均153人が参加している。一般市民向けの啓蒙講座でありいわゆるリピーターが多い。仙台市内の大学が実施している公開講座の中でも最も成功しているもののひとつである。学科主催、研究センター主催の公開講座は、継続的に開催していく方針である。

リカレント講座は、毎年行われる講座として、受講者からのアンケート結果でも満足度が高いことが示されているが、仙台市内の他の講座と比較しても、受講者が安定して多いことから分かる。

【将来の改善・改革に向けた方策】

大学主催のものに関しては、本学の独自性が反映されたものであり、受講者数からみても適切で基本的には現路線を継承するのがよいと思われる。留意すべき点は講師の選定であり、専門的内容になり過ぎないようにすべきだろう。また、キリスト教的内容以外のものも考慮する必要があるかもしれない。

リカレント講座は、語学をはじめとした実務的講座に特化するやり方を、継続したほうがよいと思われる。それをふまえつつ他方で、講座内容にどれほど多様性をもたすことができるのが問題となる。また、従来は仙台市の中心部にある仙台市サテライトキャンパスで開講してきたが、2007年度は一部を本学キャンパスで開講してみた。教材や教育機器を有効利用し教育効果を高めていく観点から、設備の整った本学を会場とする講座を増やすべきだろう。

(3) 教育研究上の成果の市民への還元状況

【現状】

大学の理念、学科の教育目標で養われた学生たちのボランティア活動は、周辺の保育所

や施設の高い評価を得ており、教育成果の市民への還元繋がっている。人間発達学科の保育士課程第1期生の高い就職率に見られるように、心理学分野に強い保育士養成という教育目標は社会に広く認知されている。

市民への教育研究上の成果は、おもに公開講座の場をとおして還元されている。一例をあげれば、前述のリカレント講座のうち「福祉事業の経営環境と経営管理者の役割」（全5回）は、宮城県介護事業者意識改革セミナーとして行われているものと同じ内容を一般開放したものであり、福祉政策への間接的ながら貢献しているといえるだろう。この講座は平成19（2007）年度で3回目となる講座で、専門的内容のものであるにもかかわらず、過去2年間、平均27名の参加者があった。受講料（一回の講座当たり500円）を抑えていることも市民への還元の一つといえるかもしれない。

その他に各学科教員には、諸学会、他大学、市民団体等が主催する講演会、研修会指導、高等学校における指導委員・出前授業、各種検定試験審査員・作問委員等の委嘱・派遣要請が毎年多数あるが、全ての教員の委員・役員等の就任申請に関して正確に把握しきれていない。おもなものをあげると次のとおりである。

教育・資格に関わるもの

文部科学省認定秘書技能検定試験審査員
 文部科学省委嘱事業専修学校職業人再教育社会福祉講座講師
 大学実務教育協会加盟・課程審査委員会委員
 大学基準協会専門評価分科会委員
 スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール運営指導委員
 仙台市市民センター研修会講師
 雇用・能力開発機構宮城センター委託訓練講師

福祉に関わるもの

山形県保育所新任保育職員研修講師
 宮城県医療社会事業大会シンポジウム司会
 社会福祉法人・施設職員研修「特別研修（面接技術）」講師
 訪問介護員養成研修講師
 障害者施策推進協議会委員
 認知症介護指導者養成研修「教育論」担当
 家族相談士養成講座講師
 保育士試験（実技）採点委員

社会活動に関わるもの

市民企画コンペ審査委員

この他にたとえば、宮城県や仙台市の自治体・市民団体等が主催する講演会やシンポジウム等で「市民の健康づくり」「食生活や栄養のあり方」「子供の食育」などに関する講演の依頼等があり、これらの機会をとおして市民に還元されている。

こうした教育研究上の成果の還元は、地元の人々を中心に向けられているが、先進的な取り組みによって全国的規模で貢献している一例をとりあげる。精神保健福祉交流促進協

会(特定非営利活動法人)の理事長も務める谷中輝雄教授(総合福祉学科)は、平成18(2006)年から本学精神保健福祉に関わる精神科医、心理士、精神保健福祉士を対象として、海外(イタリア)の精神保健福祉の視察研修を主催している。これは、バザーリア法(1978年)によって精神病院を廃止して先進的な取り組みをしているイタリアの精神保健福祉の現状を視察・研修するものである(第一回2006年9月23日～10月1日、第二回2007年11月12日～11月19日)。

【点検・評価】

リカレント講座「福祉事業の経営環境と経営管理者の役割」は、宮城県における福祉施設の経営の質向上に寄与していることから市民への還元的具体例の一端といえよう。ただしテーマは後続の内容を模索する段階に差しかかっている。

上述のとおり、教員は各々の専門分野を活かして教育研究上の成果を市民に還元している。そうした教員の活動は、近隣地域に限定されず全国レベルで貢献しているものがある。ただし全学的にみて、各教員の取り組みを相互に知る機会がほとんど無い。

【将来の改善・改革に向けた方策】

教育システムとしては、インターンシップのシステム整備とキャリアサポート体制の整備が学生の社会貢献・市民への還元を更に後押しすると期待される。こうした改善も、社会一般、会社、公的機関等との信頼関係を築きながら進めることが望まれる。

これからの大学は、社会や地域にいかに貢献できるかが問われている。今後、教員間で社会貢献に関する共通認識を持ち、地域社会に開かれた大学として、成果を市民へ還元する機会を拡大していくことが望まれる。人間発達学科、総合福祉学科、健康栄養学科は、心理、教育、社会、福祉といった専門領域を、また国際教養学科は語学、文学、言語、情報、ビジネス、経済など多岐にわたる専門領域をもっているため、市民の現状に即した広範な貢献が期待される。

そのためにまず、こうした学外における教員の貢献について、相互啓発につながるような学内向けの広報が必要と思われる。

(4) 国や地方自治体等の政策形成への寄与の状況

【現状】

県、市から、あるいは国の機関から役員、委員、講師等の委嘱、派遣要請が毎年ある。前項と同様、必ずしも全てを網羅していないが、2007年度で本学に届出を出した教員が行政に関して委員に就任している件数は、国、宮城県、福島県、仙台市、およびその他の団体(法人等)のそれぞれ以下のようなことになる。

- 国(教育に関するもの) 2
- 宮城県(男女共同参画に関するもの) 2
- 宮城県(福祉に関するもの) 3
- 宮城県(文化に関するもの) 1
- 福島県(教育に関するもの) 1
- 仙台市(教育に関するもの) 3
- 仙台市(福祉に関するもの) 2
- その他の団体(福祉に関するもの) 4

【点検・評価】

上記は、教育政策や福祉政策などに直接・間接的に寄与するものと思われるが、具体的にどのような政策に寄与したか確認することは、現時点でむずかしい。

【将来の改善・改革に向けた方策】

政策形成に寄与することができるのは、本学では福祉や教育の分野が主な専門領域であると思われる。教育の分野では教育行政や男女共同参画をはじめ、行政や政策にすでに関わっている教員がいる。そのような学内リソースを掘り起こすことによって、政策形成への寄与の筋道を立てられるようになるだろう。

(5) ボランティア等を教育システムに取り入れ地域社会への貢献を行っている大学・学部等における、そうした取り組みの有効性

【現状】

「保育実習」、「施設実習」、「フィールドスタディ」（人間発達学科）等の科目を通してのボランティア活動により、福祉施設、保育所との接点が多い。このような形で社会貢献している学生に対しては、さまざまな形で支援している。これらの科目に関連して、制度化するまでに至っていないが、夏季休暇等におけるボランティア活動を積極的に指導している。

数多くの福祉施設への定期的なボランティア活動や夏祭りなどイベントの参加など、地域への貢献の活発さも特筆に値する。特に仙台白百合会への学生の定期的ボランティアやイベントへの参加はすでに常態化していて、交流が密に行われている。表 10-3 を参照されたい。

【点検・評価】

保育士課程の学生は、ボランティア等の活動において、後期の高学年の実習にその成果は大きく、施設、保育所からも感謝が寄せられ高い評価を得ている。教育システムにある程度ボランティアが取り入れられることによって、成果が目に見え易い。それに比べると、他の専攻・学科の学生の社会との関わりの現状は把握し難い。大学のボランティア活動支援センターの様なものが無いために、学科と社会福祉施設との信頼関係の上で効果を生んでいるように思われる。特に仙台白百合会は、本学が意図して立ち上げた社会福祉法人であるので、目的どおり学生が実習をし、ボランティアやイベントに参加していることは高く評価される。

【将来の改善・改革に向けた方策】

大学のボランティア活動支援センターの様なものが必要か検討を要する。現在は仙台白百合会へのボランティアやイベントへの参加人数を増員出来るように、スタッフと教員との連携を密にしていきたい。また、仙台市内の福祉施設を開拓していく必要がある。

2. 企業等との連携

(1) 大学と大学以外の社会的組織体との教育研究上の連携策

【現状】

現在、東北大学をとおして産学連携の教育研究の呼び掛けがある。しかし現時点では本学は参加していない。また、本学では、企業と連携した社会人向け教育プログラムの運用

や共同研究体制を整備していないが、行政機関との連携による教育活動を行うための提携を本年結んだところである。

すなわち、仙台市教育委員会との「連携協力に関する覚書」（平成19年9月5日）において、仙台市と本学が「様々な教育上の諸課題に的確に対応するため、相互に連携協力し、双方の教育の充実・発展に資すること」が目的とされている。そのための具体的な活動として、

1. 児童生徒の学校生活の支援に関すること、
2. 学校生活において様々な課題を抱えた児童生徒への対応に関すること、
3. 大学及び学校における教育研究面での協力に関すること、

その他が明記されている。この覚書をもとに、現在、本学では、教育委員会からの要請にもとづいて本学の学生を学生ボランティアとして学校に派遣し学校の教育活動の支援を行う活動を実施している。今後、こうした行政との連携活動をさらに活発に実施していきたいと考えている。

【点検・評価】【将来の改善・改革に向けた方策】

いわゆる産学連携に関しては、本学はまったく手がつけられておらず、その担当部署も現在のところ作られていない。研究上の成果として特許を有する教員もいるが、研究活動のさまざまな面での環境が整備されているとはいえない。まず早急に産学連携のあり方についてのリサーチを行う組織を発足させる必要がある。また、行政との連携に関しては、仙台市との取り組みがスタートした点は評価されるが、さらに宮城県との連携も進めるように努力すべきであると思われる。

(2) 企業等との共同研究、受託研究の規模・体制・推進の状況

【現状】

学外との共同研究の一つに、人間発達研究センターの研究活動がある。平成18(2006)年度の文部科学省補助金「学術研究推進特別経費－共同研究経費」の助成を受け地域共同研究を進めている。ただし、この助成の方針は大きく変わり、平成19(2007)年度は「地域共同研究支援」に申請枠が変更となった。これに伴い申請最低額の基準がグループごとから課題ごとに変ったことで、裁可の可能性が下がったため、申請最低額を引下げる措置を取るようにしていただいた。所要経費は1研究課題あたり200千円以上となっている。この助成による研究は広範な分野にまたがり、共同研究者には、他大学の教員、元大学教員、ソーシャルワーカー、スクール・カウンセラーなどがいる。

【点検・評価】

継続的に学外との共同研究を推進していくものとして、人間発達研究センターの取り組みは評価される。現在継続中の共同研究は、本学の規模にほぼ見合ったものといえる。

【将来の改善・改革に向けた方策】

現在、研究センターの共同研究は、研究内容にしたがってリサーチ・グループを形成しているが、共同研究者として企業等と連携していけるように模索する必要があるだろう。

以上、本学における社会貢献の現状、点検・評価、将来の改善・改革に向けた方策を述べた。社会貢献につながる学内のリソースやポテンシャルをまだ活かさきれておらず、その学内環境の整備の遅れは、大学全体の印象や評価に影響していると思われる。他方で、

これらの本学の社会貢献は、仙台白百合短期大学時代からの蓄積に基づき、各教員の努力の結実であることは疑いないが、最初に述べた本学の建学の理念が社会貢献にどのように活かされているか必ずしも明らかではない。本学が教学・研究上の成果のみならず、直接にどのように社会に貢献してきたか、建学の理念との関連で確認する方策も必要と思われる。